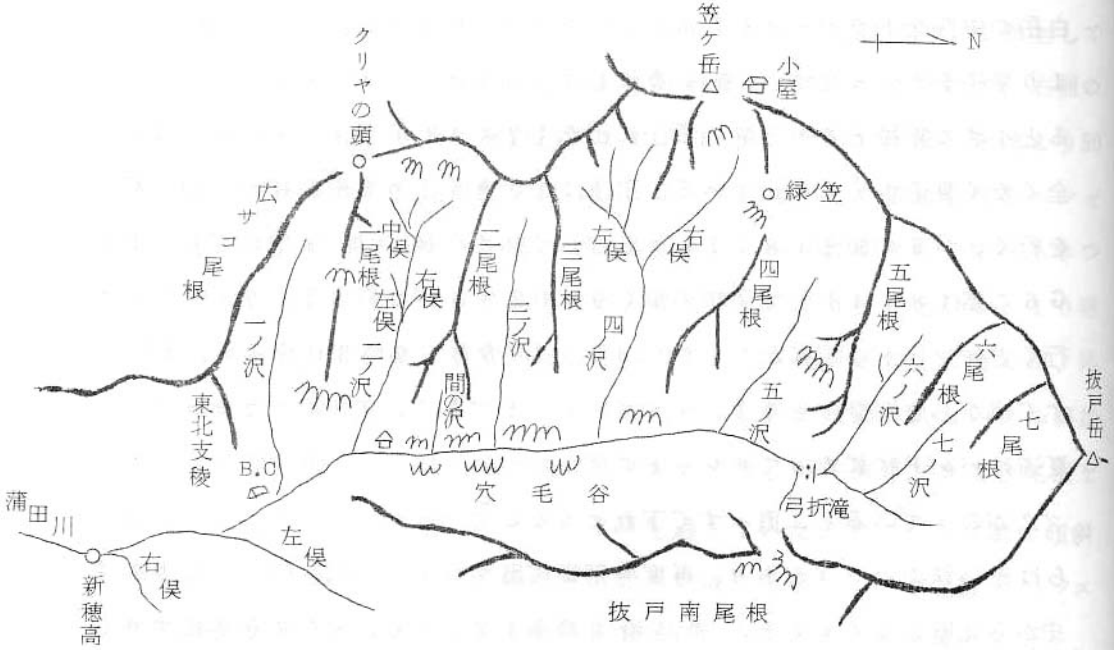
キレット小屋着（13：40）北尾根の頭（15：30）G5の頭（16：25）。来るときはすぐであった、五竜への登りが長く感じられる、五竜岳着（17：05）。17時15分出発BCへ向って走るようにして下る。BC着18時10分。

5 笠ケ岳東面　昭和45年5月　安沢　寛

45年度の5月の連休合宿の地として笠ケ岳を選び、穴毛谷、一ノ沢出合の堰提下にベース、キャンプを置き東面の各ルートにおいて合宿活動を行なった。

5月の連休といえどもまだ訪れる人の少ない笠ケ岳において静かな山行を味わうとともに、天候にめぐまれて予定していたルートのほとんどを完了することができた。以下はそれぞれについての記録である。

〔笠ケ岳東面概念図〕



〔第一尾根より一ノ沢下降〕

メンバー：四方立夫・安沢寛

5月3日（曇のち晴）6時45分出発。第一尾根は普通一ノ沢側から登られているが、我々は二ノ沢側から取り付くことにして二ノ沢へ向かう。一尾根の二ノ沢側は岩壁となっており、デブリが沢一ぱいにつまっている。沢が左折するとすぐ合流点であり沢が広けてくる。一尾根の岩壁帯もやっと切れて、ブッシュまじりの雪面となる。左俣へ少し入り、ルンゼ状の雪面をルートに取り登り始める（8：30）。雪面を登り尾根上に出るとそこは岩峯のすぐ手前であった。

アンザイレンし、ブッシュまじりの凹角にルートを取る。凹角をぬけ、二ノ沢側に回り込むと、途中より階段状の岩場となる。それをぬけると、再びブッシュ帯に入り雪壁を木登りを混えて岩峰上に出る。3ピッチの登りを終えてザイルをとき小休止とする（11：20）

それより先は雪稜となり、小さな登り下りを4回ほどくりかえしながら行くとクリヤの頭に出た（13：10）。

クリヤの頭を少し下った地点より一ノ沢の下降に入る。途中少し急になり、亀裂が入った所があるが問題となる所はなく、全体に沢幅が広く下降路として十分使用できる、B，C着（15：00）。　（記．安沢）

〔二ノ沢Bルンゼより第三尾根〕

メンバー：中野．宮本．山内

5月3日（曇のち晴）一ノ沢出合付近のBCより小一時間費して三俣に着く。左俣は第一尾根に右俣は第二尾根へ一気に突上げている。このあたりまでは傾斜もゆるく。幅もかなり広い。中俣を登るが、雪崩、落石の跡が無気味だ。Bルンゼは雪が不安定な上に、大きなハング状の岩を持った滝場がある。雪、氷とも不安定で、滝の上部は浮石でいっぱいだが、ショルダーで滝を越え慎重に突破する。この滝から先は雪こそ悪いが難なく稜線に達する。（11：30）

昼食後第三尾根から四の沢を経て帰着する。

（記．中野）

〔第二尾根〕

メンバー：越智 修．苗村 元

4月30日（晴）7時出発。穴毛谷を少し行き、間ノ沢に入る。100Mほど登った所で左岸の岩溝に取り付く（7：40）。急なルンゼで、スタンスは外傾しており、いやな登りである。上部は濡れており増々悪く、ブッシュもあてにならない。やっと小さな雪田に着く。ここからは、右手の沢へ切れ落ちたナイフエッジであり、しかも猛烈なブッシュである。傾斜が急になり一旦細いコル状の所に出るが、右に無名沢源頭の垂壁を見ながら、再び急なブッシュが長々と続く中を行く。やっとなだらかな雪稜となり、巨岩の露出したJ．Pに出る。第一岩峯を目前にしてルートを確かめる。間ノ沢側に切れ落ちた尾根を、一ケ所懸垂で下り、カール状になった三ノ沢側をトラバースし、雪壁から岩峯に取り付く（10：45）。垂直に近いブッシュの中でザイルをのばすのは大変な苦労である。二ノ沢からの尾根を一本合せた所で視界もよくなり傾斜も一段落する。

雪壁から岩の露出したナイフエッジとなり、ピナクルを通過して雪壁を越え、そして30Mの垂壁を左へ巻く。雪田が幾っか現われ、雪壁を越すと30Mの壁が現われる。右側のルンゼから雪壁に出て回り込み上に出る。その上の岩の上に大きく張り出した7M程の雪壁を苦労の末、大きく切り込んではい上る。それより先はなだらかな雪稜が続きコンティニュアスで進むが、雪の状態が悪くナイフエッジになると緊張する。コルを通過すると稜線直下の長大な雪壁で雪もしまって来て高度感が技群に出る所である。クレバスを避けながらできるだけ尾根通しに登る。途中よりまばらな木をビレイに使ってスタカットにする。まだか、まだかと思っているうちに稜線に出た。（16：40）。

クリヤの頭より一ノ沢を滑り降り、BCへ捩る（19：30）

〔第三尾根〕

メンバー．越智　修．苗村　元

5月1日 晴　穴毛谷本谷より三ノ沢に少し入った所より取付く（7：30）。上部の岩壁を目差して疎林の中を登る。岩壁下の雪田に着いて見ると、横いっぱいに広がる岩壁で直登できそうもない。トラバースして岩壁の右端にあるルンゼより巻く。ブッシュを技けると小さな第二の岩壁が左に見えるが、そのまま通過する。やがて雪稜となり、小さな雪壁を越えると、なだらかな雪稜となり稜線まで続いている。上部には雪どけの穴や、これが発達して雪壁となった所があるが、問題なく通過する。四ノ沢の第一岩稜を見下すようになった頃、小さな峰を登るとナイフエッジとなる。すぐに雪庇の跡を乗り越して稜線に出る（12：25）

稜線を通り、クリヤの頭に達したのち広サコ尾根より東北支稜を下る。

（記．苗村）

〔四ノ沢より五ノ沢〕

メンバー．中野　力．増瀬光弘

4月30日 晴　笠ケ岳東面の沢を登るにはこのシーズンが最適だろう。東面で最も大きな沢がこの四ノ沢だ。穴毛谷のデブリを踏んで四ノ沢の広い出合に立つとき、せまりくる奥壁、第一岩稜、第二岩稜を迎げば笠ケ岳東面に来た実感がひしひしとせまりくる。

二俣で軽い食事をとり、右俣をつめる。右俣は奥壁直下でさらに二俣になっている。このあたりから落石がはげしくなり、ピナクル尾根へ小さなルンゼを登る。ピナクルを少し越えたあたりの屋根に出る。すぐ右に絶え間のない落石の響きを聞きながら、ザイテングラードを頂上に向う。陽のさす頂で一時間余り昼寝を楽しみ第四尾根隊を待つ。

下降は第四尾隊と共に五ノ沢を降りる。　（記．中野）

〔第三尾根〕

メンバー．越智　修．苗村　元

5月1日 晴　穴毛谷本谷より三ノ沢に少し入った所より取付く（7：30）。上部の岩壁を目差して疎林の中を登る。岩壁下の雪田に着いて見ると、横いっぱいに広がる岩壁で直登できそうもない。トラバースして岩壁の右端にあるルンゼより巻く。ブッシュを技けると小さな第二の岩壁が左に見えるが、そのまま通過する。やがて雪稜となり、小さな雪壁を越えると、なだらかな雪稜となり稜線まで続いている。上部には雪どけの穴や、これが発達して雪壁となった所があるが、問題なく通過する。四ノ沢の第一岩稜を見下すようになった頃、小さな峰を登るとナイフエッジとなる。すぐに雪庇の跡を乗り越して稜線に出る（12：25）

稜線を通り、クリヤの頭に達したのち広サコ尾根より東北支稜を下る。

（記．苗村）

〔四ノ沢より五ノ沢〕

メンバー．中野　力．増瀬光弘

4月30日 晴　笠ケ岳東面の沢を登るにはこのシーズンが最適だろう。東面で最も大きな沢がこの四ノ沢だ。穴毛谷のデブリを踏んで四ノ沢の広い出合に立つとき、せまりくる奥壁、第一岩稜、第二岩稜を迎げば笠ケ岳東面に来た実感がひしひしとせまりくる。

二俣で軽い食事をとり、右俣をつめる。右俣は奥壁直下でさらに二俣になっている。このあたりから落石がはげしくなり、ピナクル尾根へ小さなルンゼを登る。ピナクルを少し越えたあたりの屋根に出る。すぐ右に絶え間のない落石の響きを聞きながら、ザイテングラードを頂上に向う。陽のさす頂で一時間余り昼寝を楽しみ第四尾根隊を待つ。

下降は第四尾隊と共に五ノ沢を降りる。　（記．中野）

〔第四尾根～五ノ沢下降〕

メンバー．安沢　寛．山本三郎

4月30日 晴　7時に二尾根へ行く二人とともにB．Cを出発する。四ノ沢を越え四尾根の末端着（8：00）。末端に入っているルンゼをつめ四尾根下部のコルに出る（8：30）。四ノ沢側は切れ落ちており常に落石が落ちている。アンザイレンしラントクルフトを越え、ブッシュにかかっているブロックを乗越し、ブッシュ帯に入る。ブッシュが切れ小さな雪壁を登るとナイフエッジの雪稜となり視界が広ける。雪稜はすぐに消え四ノ沢側へ大きく出ているガレ場になる（10：00）。もろい岩に気をつけながら登るとゆるやかな雪稜となる。広い尾根の中央部は岩が出ているので四ノ沢側の岩と雪のコンタクト．ラインを進む。行く手に緑の笠の岩峯が大きく広がって来る。このころよりメンバーの一人の体調が悪くなりペースがおそくなる。雪の状態が悪く、四ノ沢からはたえず雪崩の音が聞えてくる。緑の笠の岩峯直下を目差しカンバの木を支点に使いながらザイルを使用して登る。岩峯の直下を右へトラバースし、五ノ沢側へ巻く。五ノ沢側のルンゼ状の雪面を登り、緑の笠の頭に出る（14：30）

五ノ沢上部のカールの雪面が日光をあびて輝いている。ゆるやかな雪面をコルへヒザまでもぐる雪に苦労しながら下る。雪は依然やわらかくなかなかはかどらない。稜線直下で四ノ沢隊と合流する（15：30）。休息の後、五ノ沢へ下降することになり広いカールを下る（16：00）。カールから両岸がせばまり、滝がうまっていると思われる急斜面でザイルを使用し廊下状になった沢を出合へ向かって下降する。出合で少し休んだ後、B．Cへ向かう（18：00）。B．C着（19：00）

（記．安沢）

〔第五尾根〕

メンバー．四方立夫・松本繁文

．宮本義海・山内　崇

5月4日 快晴　6時45分出発。弓折の滝手前の穴毛谷の傾斜が急になった所で六ノ沢隊と別れる。普通は滝を越えて、六ノ沢より五尾根に取り付くのだが今回は末端の急なルンゼをつめて右側へ出て、五尾根に取り付く。尾根に出ると六ノ沢隊が下に小さく見える。気温が高く日差がきつく雪面からの反射がまぶしい。この尾根の下部はブッシュが多く、あまり快適ではない。ブッシュをつかみいっきに高度をかせいで行く。右側は六ノ沢に切れ落ちていて、雪の状態も悪いがブッシュ沿いに行けば安全である。バットレスが見えるあたりより岩が顔を出しはじめ、五ノ沢側も切れ落ち気分がよい。ブッシュが切れるあたりで六ノ沢よりコールが聞える。雪崩のため五尾根に上ろうとしている所であるらしい。そこでザイルを出し上からサポートする。新人にとっては苦しい雪壁だが無事全員五尾根に上がって来た（11：00）全員そろった所で昼めしにする。新人は、なにか楽しそうである。天候はよく陽が暑い。昼食を終え、全員で五尾根を進む。急な斜面を越えた所で、OBの2名はその日のうちに下山しなければならないため五ノ沢へ尻セイドで下って行った。ここから稜線へは、急な雪面を越えればすぐであった（13：15）。稜線よりピークまではなんなく着く。あいにくピークを踏むころにはガスがかかり始め、ながめを楽しむことができなかった（13：55）

下りは稜線の夏道を行きクリヤの頭（16：00）を経由して、一ノ沢を下降しB，Cに着く（17：30）。

（記．松本）

〔抜戸南尾根～三ノ沢下降〕

メンバー．四方立夫．三星善行

4月30日 晴　B，Cを7時15分に出て末端から取り付きブッシュを漕ぎ始めたが、急峻な上にあまりに酷い石楠花の業茂に悲鳴を上げる。冬山

の事を考えて末端から取付いたが、５月山としては穴毛谷のルンゼから登りたかっただけに一層うっとうしい。

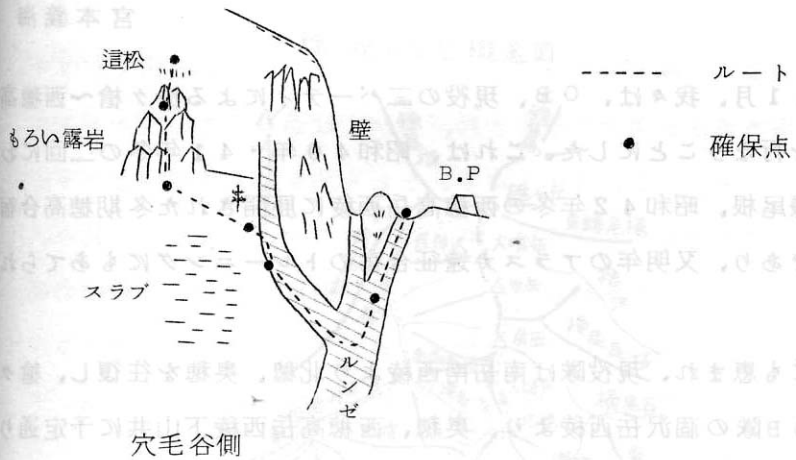
稜線に出てからは、多少は歩き易いが痩せている上にコブ状のピークが多い（２．３のコル９：３５）。Ｐ４の登りには、１０Ｍの露岩がありキスリングなら悪いだろう。Ｐ４（１８４０Ｍ？）は疎林になり、第二尾根を眺めながら昼休止（１１：２０～１２：１０）。Ｐ５の下り（１０Ｍ程）はいやらしいが、冬は雪に助けられそうである。Ｐ６からは急峻になり第一岩峰への登りになる。左俣側の雪面を行くが５Ｍ程の岩があるだけで、岩峰とは呼びがたい（１３：４０）。それより最低コルへのナイフエッジは極端に細く、両腕を拡げ、綱渡りよろしく下る。２２００Ｍからは広くなり恰好のテント場を提供してくれる。２２８０Ｍピークに荷を置く（１５：３０）。すぐ左手には鋭峰があり、穴毛谷へと岩稜を落し、登攀欲をそそる。西の笠ケ岳の複雑な雪稜は、手に取る様に全貌が望まれ、東には重畳とした槍～穂高連峰が眼前に迫っている。しかし、行手を阻む第Ⅱ岩峰の峻厳は、その浮いた気持を一瞬にしてしまう。直登するとすれば３ピッチはあり、僅かな三ツ道具では突破し切れそうもない。

４月３１日 快晴　７時半に荷をかつぎ、岩峰手前２つ目の４５度の傾斜のルンゼをＭがザイルいっぱい４０Ｍ穴毛谷に下った後、コンティニュアスで１０Ｍ下ると夏径のあるルンゼに合い、更に５０Ｍほど下ってから岩壁裏へ突き上げているルンゼを５０Ｍ程登る。傾斜は一段と増し、再びスカットで４０Ｍ登る。スラブ上の雪壁を左上し、そこからピーク目指して、もろい露岩を攀って３ピッチ目となる。４ピッチ目は岩から這松を登ると稜線へと広い雪稜が続く処に着き、ザイルを解く（１０：００）。

膝までのラッセルを強いられ抜戸岳へ向かうも、２４６０Ｍピークから傾斜は増し、苦しい登りになる。２７００Ｍで昼休止（１１：２５～１２：００）。

その後雪庇状のものをたたきつぶして抜戸の稜線に出た。

第Ⅱ岩峰



笠ケ岳着（１３：５０）。三尾根の頭（１４：５５）。三尾根の頭から三尾根を２２５０Ｍ付近まで下り、そこから三ノ沢へ２０Ｍアップザイレンを４回混じえて下り、雪崩道に入らぬ様にしながら本谷へと下る（１６：５５）。

以上であるが、冬山としては荷が重いので終始苦しい登りとなるであろうが、特に問題となる処は無い様である。

（記．四方）

記録としては以上であるが、その他六ノ沢へもパーティを出したが、たえまない雪崩のため五尾根に追い上げられてしまった。トレーニングとしては穴毛谷×状ルンゼ下部において雪上訓練、コンティニュアスにおける確保の練習などを行なった。

（記．安沢）